

保育内容 領域「表現」と乳幼児の表現遊びについての一考察
－「感性」と「表現」に着目して－

長 谷 秀 揮*

A study on the Childcare Content Area “Expression” and infants' expressive play
-Focusing on “sensitivity” and “expression”-

Hideki Hase

本稿では、乳幼児の保育・幼児教育における保育内容の一つである領域「表現」の目標とねらい及び内容と、幼児の表現遊びとの関わりについて分析と考察を試みた。具体的には乳幼児の感性と表現について、子どもの遊びと生活の視座から整理して分析し考察を加えた。そして子どもの表現遊びや近似の表現活動についての質問紙調査を保育学生に実施して考察をおこなった。また、保育所及び認定こども園の施設長に質問紙調査を実施して、表現遊びや表現活動のどの分野の知識やスキルについて、養成校で学修し身につけて欲しいと望んでいるかを把握し保育、幼児教育の現場において保育者として実際に保育する際の課題等について明らかにすることを試みた。結果、劇遊びやリズム遊びについて苦手意識を持ち、それらの知識や技能の習得を自身の課題とする学生が多数であることが明らかになり、養成課程での課題が浮かび上がった。また園の施設長の多くが、手遊びや歌遊び等の知識やスキルを学生に養成校で修得しておいて欲しいと望んでいることが分かった。

Key words: 保育内容 領域「表現」、感性、表現遊び、センス・オブ・ワンダー

1. はじめに

1989年（平成元年）に、幼稚園教育要領¹⁾が改訂され新たに、「健康・人間関係・環境・言葉・表現」が表され、これら5つの領域は幼児の発達の諸側面をとらえる、「窓口」とであるとされた。そして、これまでの「望ましい経験や活動」に代わり、「ねらい及び内容」が、それぞれの領域に明示され、就学前までに育つことが期待される、「心情・意欲・態度」を示したものであり、「生きる力の基礎」となるものとされたのである。

このうちの領域「表現」については、「感性と表現に関する領域」と定められて、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことが、目的であり目標であると示されたのである。

ねらいと内容及び内容の取扱いについては、次のように記されている。

【ねらい】

- (1) 色々なものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

【内 容】

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。

* 四條畷学園短期大学 保育学科

- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりするを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

【内容の取扱い】

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。
- (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
- (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したり、して表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

以上のように記述されているが、これは現行の幼稚園教育要領でも同様であり、また保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても全く同様の記述がなされている。その記述の中の目標やねらい、また内容や内容の取扱いにおいて、「感性」や「表現」、また「イメージ」等の重要なキーワード的文言があり、さらにそれらに「豊か」や、「自分なりの」等の形容詞を冠する記述があり、語句の解釈の難しさや中身の理解及び捉えにおける曖昧さといった印象が総じてあると考える。この点について、養成校教員としてまた実務家教員としての視座に拠り、いっそう理解と認識を深めつつ詳細かつ、よりの確に趣旨を捉えそのうえで学生に分かり易く、的を得た教授及

び指導を指向するための問題意識としたいと考える。

2. 研究の目的

領域「表現」のねらいの、「豊かな感性」や、「自分なりの表現」さらに、「イメージを豊かに」などの記述は、解釈や意味の捉え方が多様かつ広範であると考えられ、保育・幼児教育の実践の場である園においても、領域「表現」に関わる実践は、音楽表現、絵画・造形表現、身体（体育）表現を中心として多様で多岐にわたる実情があること、などの問題意識から、領域「表現」の目標とねらい及び内容と、子どもの表現遊び、表現活動についての整理と捉え直しをおこないたいと考える。また、養成校における領域「表現」の実践について学生に質問紙調査を実施して領域「表現」に関する養成教育における課題等を把握できればと考える。そしてさらに、園の施設長に質問紙調査を実施して、「表現」に関しての現場の考えや意向を把握し保育者養成の充実と寄与につなげることも目的の一つとしたいと考える。

3. 研究の方法

領域「表現」の目標、ねらい及び内容、そして内容の取扱いについて、園での子どもの遊びと生活の視座から分析と考察を加えることを試みたいと考える。また、表現活動に関しての質問紙調査を保育学生に実施し苦手意識などの学生の実情や傾向を把握して若干の考察を加えたい。また、同じく保育所及び認定こども園の施設長に質問紙調査を実施して、表現活動のどの分野の知識やスキルについて、学生時代にしっかりと学び身につけて欲しいと望んでいるかを把握し、保育現場における保育者として実際に保育する際の留意点や課題等について明らかにすることを試み考察を加えたいと考える。

4. 領域「表現」の目標及びねらいについて

(1) 「自分なりの表現」について

現行の2018年（平成30年）に告示された保育所保育指針²⁾と幼稚園教育要領³⁾、そして幼保連携型認定こども園教育・保育要領⁴⁾において、領域「表現」の目標は、前述の通り共通の記述がそれぞれにあり、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」こと、となって

いる。この目標で重要と考えられる記述は、「自分なりに表現する」という部分であると考えられる。

乳幼児期の子どもが表現する際の具体的な内容は、何かの反応であることが多く、そして年齢が下がるにつれて表出が多数になるといえる。子どもは生後間もない乳児期の泣き声やクーイングのように、言葉の獲得以前には生得的、身体的な反応が主で、喃語や一語文の形成と共に、言葉による表出が出来るようになる。

前述の幼稚園教育要領の領域「表現」の内容の取扱いにおいては、「(2)子どもの自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、子ども自身の表現しようとする意欲を受け止めて、子どもが生活の中で子どもらしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。」と、記されている。確かに子どもの自己表現は、内容面でも方法面でも素朴に見える形で行われることが多く、率直で直接的であることが多くある。例えば独り言やつぶやきなどのように形式が整った表現にはならない場合や、表現内容が明快でない場合も多くあるが保育者は、そのような表現を子どもらしい表現として受け止めることが大切であるといえる。受け止め共感することにより、子どもは様々な表現を楽しむことができるようになり、そして表現する喜びを感じ、表現への意欲を高めていくようになるのである。

(2) 「豊かな感性」について

感性とは人が持っている感覚器官を使って五感で、「見て・聞いて・味わって・匂いにとって・触れて」感じる、感じ取る、といったその人の特性、性向というものだといえる。「感（カン）」という字について漢字辞典によると「心が動く・心を動かす・物事にふれての心の動き」という意味を持つ字となっている。同じく字の成り立ちを調べると、「咸」に「心」を加えた「感」は、祈りに対して神の心が動き応えることであり神様の感應を意味する字となっていて、もともとは、祈りに対して神が感じ動き、応じる意味であったが、人の心のことに意味を移し心が動く意味となったようである。

また同じく、「性（セイ）」は、「性質・性格・性行・性情・性分、生まれつき持っている人の考え方の傾向」という意味を持つ字となっている。こ

の字は、心臓の象形と、草や木が地上に生じてきた象形（「はえる・生まれる」の意味）から成り立ち、性質や性分、生まれながらの心、本性（さが）を意味するようになったようである。

幼稚園教育要領の領域「表現」における内容の取扱いでは感性について、「(1)豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」と、述べられている。

つまり、身近な環境との関わりの中での感動を、例えばクラスの友だちや保育者と共有し、その感動を様々な形で表現することにより、養われるものが感性なのである。また、自然環境と十分にかかわり、感動と共に色々な気付きを得られるよう留意することが求められているのである。したがって、感性は自然に育まれるものではなく、保育者が環境を適切に整えたり、自然環境との触れ合い体験を計画したり、適当かつ適切な働きかけを行ったりすることが必要となるのである。とりわけ、子どもが興味や関心を持ち、主体的にかかわりたくなるような環境をつくり出し構成することが重要になるといえる。

(3) 自然との触れ合いと「表現」

自然は、様々な様相を日々刻々と示し、表している。穏やかな晴天の日もあれば、暴風雨が猛威を振るう日もあり、爽やかな風も吹けば、雪が舞うような天候の日もある。そして、季節の移り変わりと共に、種々の草花や樹木、虫や小さな生き物等も我々の眼を楽しませてくれる。

自然との日常的な触れ合いは、子どもの身体的な成長をはじめ、好奇心や探求心、さらに道徳心や正義感、また自己肯定感を育み培うことにつながるものが、明らかになっている。子どもの成長発達にプラスの作用をもたらす自然の持つ教育力がクローズアップされ、保育や幼児教育の分野においても自然体験や自然遊びの実践、そしてそれらに関わる研究の取り組みが多く報告されている。

子どもの表現活動において、幼稚園教育要領の領域「表現」の内容の取扱いで強調されているよ

うに、自然との触れ合いはとても大切になる。色とりどりの草花や樹木、雄大なスケールの風景、また種々の動物や生き物などを、目の当たりにして見たり、直接触れたりすることにより、感受性及び感性が刺激され、豊かに養うことができるようになるのである。

例えば、自然現象の一つである天候についても、大人は仕事や家事の為に、また気分的に晴れの天気が有り難い、と思うことが一般的であると考えられる。しかし子どもは、長靴を履いて水たまりで寄り道をして遊ぶことができるし、カエルの鳴き声を聴くことができたり、木の葉の上にカタツムリを見つけることもできたりするので、雨の日にも楽しくワクワクする気持ちを持つことができる。

空を見上げた時、顔を打つ雨に「冷たい」と感じることも、水たまりに降る雨が作る波紋や、木の葉の上の雨の粒に目を凝らして「美しい」と感じることも、長靴で踏みしめた時の水の音や、カエルの声に「面白い」と感じることも、子どもの感受性及び感性を刺激してくれる。

自然との触れ合いや、その中での遊びや生活の経験は、生きる力の基礎を子どもが育み培うことにつながり、大きく寄与することを、小学校学習指導要領をはじめ、保育所保育指針や幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領においても同じように記されている。したがって、子どもの感受性及び感性を、豊かに育むことを意識しながら、保育・幼児教育実践において環境を適切に整え構成することを通して、子どもと自然との日常的な触れ合いをコーディネートすることの必要性及び重要性を、保育者は深く認識することが求められるといえる。

5. 質問紙調査について

(1) 保育学生への質問紙調査の結果及び考察

○対象：S短期大学 保育学科2年生85名

回答数72 回収率84.7%

○実施時期：2022年10月

○内容：保育内容 領域「表現」に関わる表現遊び、表現活動に関する質問紙調査

下の10項目から1項目を選択

表現遊び、表現活動の全10項目は次の通り

①：「手遊びや歌遊び等」

②：「童謡などの歌唱等」

③：「リトミック遊びやリズム遊び等」

④：「簡単な楽器遊び等」

⑤：「描画遊び絵画遊び等」

⑥：「造形遊びや工作遊び等」

⑦：「運動遊びや体育遊び等」

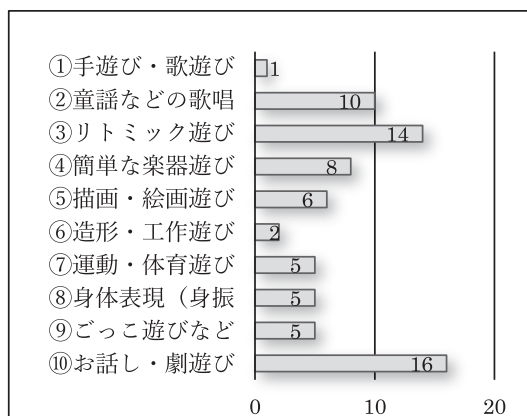
⑧：「身体表現（＝身振り表現）遊び等」

⑨：「ごっこ遊び等」

⑩：「お話（＝ストーリー）遊びや劇遊び等」

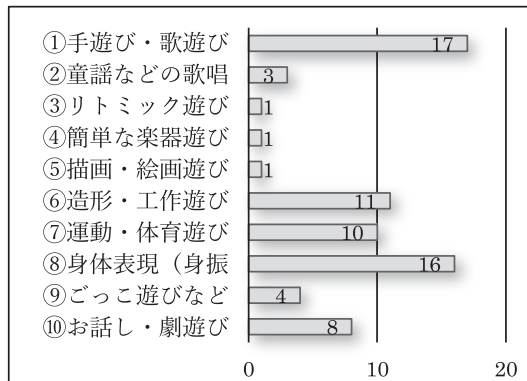
I-I 学生が最も苦手で自身の課題であるとする表現遊び

○調査結果 I (n=72)



I-II 学生が最も重要であるとする表現遊び

○調査結果 II (n=72)



【結果及び考察】

学生に対する質問紙調査の結果は、調査結果 I から、園の行事の中で運動会と並び2大行事とされる生活発表会等で取り組まれることが一般的である⑩「お話（＝ストーリー）遊びや劇遊び等」が、最も苦手な課題とする学生が最多となり、次いで③「リトミック遊びやリズム遊び等」と、②「童謡などの歌唱等」が多数となった。

⑩については、最多の結果となったが、その理由としては学生の関心が低いこと、また養成校で教授及び指導の内容として取り上げられることが

多くないことが挙げられる。園では普段の保育の中で、ごっこ遊びを含めて日常的な表現遊びの一つとして実践されていることや、そしてその積み重ねの延長線上にある行事である生活発表会において、お話（＝ストーリー）遊びや劇遊びが取り組まれていることを学生に分かり易く伝え、保育現場に即した理論と実践に基づいた丁寧な解説と指導が必要であるといえる。

③と②については、ピアノや声楽などの音楽表現に関する遊びと活動になるが、実践の為の基盤であり必要不可欠となるピアノの技術及び技能とその習熟度が、今回の結果に影響していると考えられる。つまり、学生のピアノ演奏の力量が相対的に低下していることが理由であると考えられる。背景として保育学科への入学者の多くがピアノ初心者であり、その割合が漸次増加の傾向にあることが挙げられよう。園における日々の保育に繋がり生かすことができるように、実践的かつ具体的な指導及び教授が求められる。

調査結果Ⅱでは、①「手遊びや歌遊び等」が最も重要であるとする学生が最多となり、次いで⑧「身体表現（＝身振り表現）遊び等」と⑥「造形遊びや工作遊び等」が多数となった。また、僅差で⑦「運動遊びや体育遊び等」も多い結果となった。

①が最多となったが、養成校では複数の授業において教授及び指導の内容として取り上げられていることが少なくないことが、この結果の背景として考えられる。そして乳児から幼児まで幅広く楽しめる表現遊びであり、園では日常的に保育の中で手軽で簡易な遊びとして頻繁に実施されていること、また同様に学生にとっても、実習で毎日のように子どもと楽しむ遊びであることも理由として挙げられよう。

⑧と⑦については、①と同様に日常的に園で保育の中で実践され楽しまれていることが背景にあると考えられる。また、①と同様に準備や環境設定が比較的簡易で、かつ乳幼児においては高度で専門的な知識や技術等が求められない表現遊びや活動であるため手軽であることが理由としてあげられる。さらに、共に身体に関わる遊びであり活動であるので、乳幼児の心身の健康に大きく影響を与えることが理由として挙げられよう。

⑥については、造形や工作を包含する美術教育を重視し大切にする本学の保育学科における良き

伝統が背景にあると考えられる。それゆえに授業において造形遊びや工作遊びが、乳幼児の成長発達に寄与する重要性を学生がその楽しさや面白さとともに教授及び指導されて理解が十分であることが多数となった理由の一つであるといえる。

（２）園の施設長への質問紙調査の結果及び考察

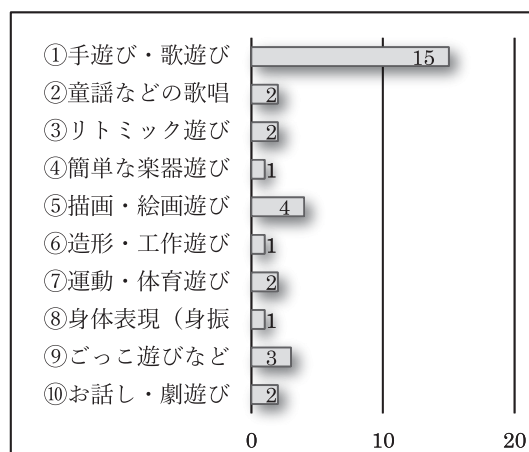
○対象：X市及び近郊市町村の42園の施設長

回答数33 回収率78.6%

○内容：表現遊び・表現活動に関する質問紙調査
全10項目（※前述と全て同じ）から1項目を選択

○実施時期：2022年10月

Ⅱ-I 施設長が最も重要で大切であるとする表現遊び ○調査結果Ⅲ（n=33）



【結果及び考察】

調査結果Ⅲでは、①「手遊びや歌遊び等」が最も重要であるとする施設長が、15名で多数となり次いで⑤「描画遊び絵画遊び等」が多くなり、また僅差で⑨「ごっこ遊び等」が多い結果となった。しかし、⑤と⑨については其々4名と3名であり、両方を合わせても①の半分にも及ばず、①を選択した施設長が、圧倒的に多く全体の45%以上という結果になっている。

これは調査結果Ⅱの学生が、最も重要であるとする表現遊びと同様の結果であり、その理由に関しても乳児から幼児まで幅広く楽しめる表現遊びであり、保育の中で日常的に手軽で簡易な遊びとして頻繁に実施されていることが、同じく挙げられよう。そしてこの遊びは、手軽で簡易ではあるが誰でも何処でも楽しむことができる遊びであり、また言語や音楽に関する能力や、手指の巧緻性の発達をはじめとする広範囲にわたる乳幼児の心身の発達を、随伴的に促すことが特徴であるこ

とが大きな理由であると考えられる。つまり遊びを通して日々成長する子どもたちの様子を目の当たりにすることで、施設長はこの遊びの必要性和重要性を実感しているのではないかと考えられる。さらに現場で日常的に様々な手遊びや歌遊びが多用されて、子どもたちと保育者が楽しんでいる状況から、この遊びの実践力を保育者の力量の中でも重視していると考えることができる。このことは視点を変えて見れば養成校に対しての要望であり保育者養成についての現場の責任者からの示唆でもあると捉えることができよう。

6. 感性を育み表現活動を培う保育・幼児教育

(1) 乳幼児期の生活及び保育と生きる力の基礎

乳幼児期に生活や遊びを通して培われる感性や表現力を含むさまざまな能力は、そのまま「生きる力の基礎」に直結するといえる。そして「生きる力の基礎」は、学童期や青年期を通じてさらに大きく育まれて、成人期に至って一人ひとりに応じた、「生きる力」へと培われ、涵養されていくのである。

日々の生活や遊びの中で自ら学び、生きる力の基礎を獲得していくためには、乳幼児期においては、子どもにとって身近な大人、つまり母親や父親などの保護者と、園の保育者（＝保育所においては保育士、幼稚園においては幼稚園教諭、認定こども園においては保育教諭）の果たす役割が、極めて重要になるといえる。このことについて厚生労働省は、保育者が子どもを実際に保育するうえでの内容や基本的な考え方を保育所保育指針で定め、かつ保育の機能である養護と教育について、乳幼児期にはその両者が保障されることが重要であると強調し、保育者の任務の第一に、生命の保持と情緒の安定をあげている。このことは、もちろん家庭における子育てにおいても基本的に最も大事にされるべき事柄となる。母親や保育者などの身近な大人に愛情を込めた世話をされ、丁寧かつ行き届いた養護を受け、応答性のある関わりを十分に経験した乳児は、大人と生活する中で、快の情動や心地よさを感じ、そしてそのことをストレートに表現しながら生きることの喜びや、人とかわるものの楽しさを原体験としていくことができるのである。生きる力の基礎は、まさにこの原体験から育まれ培われるといえる。

子どもの成長や発達にはいわゆる、「積み上げの

原則」がある。これは土台作りから始めて、順次に積み上げていくことを意味している。つまり2階建ての住宅や、高層ビルといった建物と同じようにまず基礎や土台を作り上げその上に実際の住居などの構造物を造り、積み上げていくことと類似しているのである。したがって、基礎や土台が強固にしっかりと造られていると、上部の構造物を幾層にも積み上げることができるのであり、反対に基礎や土台が軟弱であったり、手抜きの為に欠陥があったりすると、ぐらぐらと不安定になったり、何かあると崩れてしまったりすることになるのである。

乳幼児期に育み育まれる感性や、表現する力の基礎も全く同じことがいえるのではないであろうか。

この時期の生活の大切さを再認識して、子どもの健やかで全面的な成長発達の為に、必要かつ十分な豊かな生活を保障することが、身近な大人の責務であるといえる。

(2) 「基本的信頼」と感性及び表現する力

エリクソンは、著名な心理社会的発達理論として心理学と社会学の知見を融合させ、ヒトの人生における各発達段階と発達課題、及び危機についての明確な理論を打ち立てた。それは人生を8段階に区分して、それぞれに発達課題と心理社会的危機、主な対人関係などが設定されている。この心理社会的発達理論における最大の特徴は、人生における各発達段階と発達課題について成功のみが必ずしも賞賛されるわけではなく、不成功もそれなりに経験する必要性もあると、されているところにあるといえる。つまり、発達課題にかかわる成功経験と不成功経験の両方が必要であり、成功経験のみが人の発達に繋がり、発達を促していくものではなく、不成功を含めた両方を統合したものが、正常な発達に寄与すると捉えているのである。

さらに、発達段階と発達課題について、前段階の発達課題は次段階の発達段階の基礎となるとされている。これは、先ほど述べた「積み上げの原則」と同様の考え方である。エリクソンの理論によれば、乳児期の発達課題は、「基本的信頼」であり、母親が関係を取り結ぶ主な対象となる。その反対の概念は「不信」であるとされている。母親を代表とする身近な養育者との関係性の中で、愛

着が形成されることが乳児期において基本的信頼の獲得に成功したことの証左といえ、感性や表現する力を含む種々の能力が著しく伸長する幼児期の発達段階に繋がっていくといえるのである。

(3) 応答性を大切に生活

一般にヒトは、生後すぐから数カ月間はもちろんのことであるが、満1歳頃までの乳児の間は、母親にほぼ全面的に依存して生活するわけであるので、愛情をもって世話をしてくれる身近な存在として母親を認識し、そして相互に関係を取り結ぶ主な対象であることは当然であるといえる。エリクソンの理論では、母親と一対一の関わり合いの中で、堅固な信頼関係を築くことが、発達課題である「基本的な信頼関係」を獲得したことに繋がるといえる。そして、母親と同様に身近な人的環境である父親や祖父母、また保育所や幼稚園、認定こども園等の保育者も母親と同様に、密接に関係を取り結ぶ対象となるのである。

こうした、母親を中心とした身近な大人による愛情ある世話や、遊びを基本とする関わりを通した、いわゆる「好き好き関係」の中で生まれ育てられていく基本的な信頼関係は、感性や表現する力の芽生えと伸長を含む、その後の子どもの成長発達の基盤となるといえる。さらに、「心の拠りどころ」であり「安全基地」である母親との愛着、すなわち緊密な相互信頼関係は、子どもが成長するにつれて広がっていく身近な人や友だち、周囲の他の人たちとの関係の基盤ともなる。それは換言するならば、人間に対する根本的な信頼感、安心感を育み醸成するものであるといえる。つまり母親との信頼関係は、子どもの社会性の発達の基盤であり、ヒトが人間として育てられ社会的存在として帰属する社会の中で暮らし生活し、そして社会的な義務や責任を社会の一員として果たしていくにたる人として育っていく基礎となり土台となるのである。

その相互の信頼関係を強固に構築する為には、乳児にかかわる身近な人的環境である母親が、応答的であることが重要になる。例えば微笑や凝視、クーイングや泣き声等の乳児の働きかけに対して、母親から何らかの応答がある場合は、つまり乳児を取り巻く人的環境が応答的である場合は様々な能力の発達が促進され、感性や表現する力の基礎・土台も育まれることになるのである。子

どもの豊かな感性や表現する力も、当然のことであるが、その基礎及び土台に立脚して育み育まれ、培われていくものであるといえる。

7. 今後の課題と展望

領域「表現」と表現遊びや表現活動は一体であり不可分であるので、これからも様々な乳幼児の表現遊びと活動を、学生と共に実践を通して楽しみながら研究に取り組んでいこうにしたいと考える。そして日頃の保育の中での遊びや活動はもちろんであるが、その日々の遊びや活動の延長線上にあり、それらの集大成である行事についても視野に入りたいと考える。行事は、園での日頃の保育における様々な遊びや活動を通し獲得した表現する力をはじめとして、種々の力を発揮する機会として取り組まれているが、運動会、作品展（絵画造形展）、音楽会、生活発表会等があり、それぞれの行事の中で子どもたちは、音楽表現、絵画造形表現、身体表現（身振り表現）、他を含む総合的な表現を発表している。保育の中で表現遊びや表現活動に取り組むことにより、乳幼児がどのような音楽、造形、身体、その他の表現する力を獲得し、その力を通して行事において自己を発揮し自信や意欲をはぐくむ機会としているのかについて今後の研究課題としたいと考える。

著書「センス・オブ・ワンダー」⁵⁾で、レイチェル・カーソンは、子どもの“不思議がる心”であり“これは何故なのだろうと疑問に思う心”である、センス・オブ・ワンダーの重要性を説き、子どもの素朴な疑問や不思議に思う気持ちを大事にすべきだと訴えている。その為には、子どもの傍に寄り添い子どもの素朴な疑問や不思議に思う気持ちを受け止め、共感して理解しようとする、そのような大人の存在が必要不可欠であるとも述べている。また、「知ることは、感じることの半分も重要ではない」と述べて、感性の大切さを訴え、人の持つ感性がその人の人生を豊かにするカギであることを強調し、特に自然環境に対する感性を重視したのである。何故なら子どもにとって、また大人にとって自然は驚きと感動の宝庫だといえるからであり、自然の中でこそ人の感性は磨かれるのだ、ということを確信していたからだと考えられる。

感性は、直訳するとセンスとなり、「センス・オブ・ワンダー」をそのまま訳すと、「不思議なことにつ

いての感性」言い換えれば、「何故だろうと疑問に思ったり、どうしてだろうと不思議に感じたりする感性」ということになる。例えば、雨上がりの空に七色の虹がかかり見上げてみつけた人は、皆誰も「美しくて本当に綺麗だな、でもなぜ七色なのだろう？」そして、「不思議だな、なぜ半円に近い形なのだろう？」などと心を動かされ、そして不思議に思う気持ちを多かれ少なかれ感じる。その気持ちの動きや揺れの幅が、まさしく感性の幅であると捉え感性の豊かさを表すものであると考えることができるのではないだろうか。感性については、レイチェル・カーソンから学ぶことが、まだまだ多くあるのではないかと考えている。保育者を目指す学生には学生時代を好機ととらえて、自然に触れ親しむことを数多く経験するように助言し促すことも、今後の課題の一つとしたい。

引用文献

- 1) 文部科学省 編「幼稚園教育要領」
フレーベル館 1989
- 2) 厚生労働省 編「保育所保育指針」
フレーベル館 2018
- 3) 文部科学省 編「幼稚園教育要領」
フレーベル館 2018
- 4) 内閣府 文部科学省 厚生労働省 編
「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」
フレーベル館 2018
- 5) レイチェル・カーソン 著 上遠恵子 訳
「センス・オブ・ワンダー」新潮文庫 2021

参考文献

- 1) 秋田喜代美 三宅卓茂夫 監修 浅野卓司 編著
「子どもの姿からはじめる領域・表現」
みらい 2021
- 2) 小林洋子 沼田峰奇 著「音楽教育のススメ」
幻冬舎 2021
- 3) 岡本拡子 花原幹夫 汐見稔幸 編著
「保育内容 表現」 ミネルヴァ書房 2020
- 4) 島田由紀子 駒 久美子 編
「コンパス 保育内容 表現」 建帛社 2019
- 5) 岡 健 金沢妙子 編著
「演習 保育内容 表現」 建帛社 2019
- 6) 今井真理 編著 「保育の表現技術実践ワーク」
保育出版社 2016

- 7) 入江礼子 榎沢良彦 編著
「シードブック 保育内容 表現」 建帛社 2007
- 8) 無藤隆 監修 浜口順子 編著 「領域 表現」
萌文書林 2007
- 9) 名須川智子 高橋敏之 編著
「保育内容 表現論」 ミネルヴァ書房 2006

－11月21日受稿、11月21日受理－

**A study on the Childcare Content Area “Expression” and infants' expressive play
-Focusing on “sensitivity” and “expression”-**

Hideki Hase

Shijonawate-gakuen Junior College

In this paper, I tried to analyze and consider the relationship between the goals, aims and contents of the area "expression", which is one of the childcare contents in infant care and early childhood education, and infants' expressive play. Specifically, I organized, analyzed, and considered the sensibility and expression of infants from the viewpoint of children's play and life. Then, we conducted a questionnaire survey on children's expressive play and similar expressive activities for nursery school students. In addition, we conducted a questionnaire survey of facility managers of nursery schools and certified children's centers to understand which fields of knowledge and skills in expressive play and expressive activities they want to learn and acquire at training schools. I tried to clarify the problems when actually childcare as a childcare teacher in the field of childcare and early childhood education. As a result, it became clear that there were many students who felt that they were not good at drama play and rhythm play, and that the acquisition of those knowledge and skills was their own task. It was also found that many of the facility managers of kindergartens want their students to acquire knowledge and skills such as hand games and song games at training schools.

Key words : Childcare content Domain "expression", sensibility, expression play, sense of wonder